

## 第8章 河道特性

山地が流域の約8割を占める豊川は、山間渓谷部を比較的急勾配で下り、その後豊橋平野で蛇行を繰り返しながら瀬や淵を形成し緩やかに流れ、河口に至る。

上流部は、宇連川及び宇連川合流点付近から本川中流部にかけて中央構造線が東西に走り、さらに設楽火山群などにより地質は複雑で、阿寺の七滝・乳岩峡・鳳来峡などを溪流となって流下している。

中流部は、全体に礫径が大きく100mmを越える礫が多く見られ、砂粒土以下は極めて少なく、特に早瀬などの流れのある所での河床の表面粒土は10mm以下の礫は見あたらない。また、河岸段丘部から豊橋平野部を緩やかに蛇行しながら流下し、砂州が発達して瀬や淵を形成している。

下流部は、河床勾配も緩く放水路分派点の上流付近から感潮区域となる。河床には流れの中心部に細礫が有るほかは砂粒土が主体となり、大きく蛇行しながら、干拓地を経て三河湾に注いでいる。

豊川河川縦断図を図8-1に



豊川上流部



豊川中流部



豊川下流部

示す。

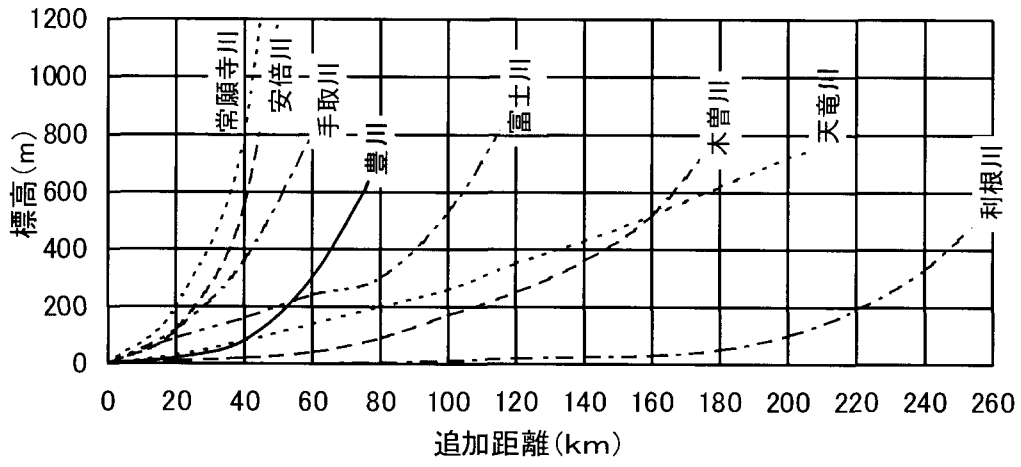


図 8 - 1 豊川河川縦断面図